戸籍と国籍の近現代史——民族・血統・日本人　目次

はじめに　7

第1章　戸籍とは何か——「日本人」の身分証明

1　戸籍が証明するもの　27
2　監視する戸籍——個人情報の掌握　40
3　戸籍の「氏」が示すもの——「家名」に一元化された個人の名　48
4　国籍証明としての戸籍——戸籍に載れば「日本人」？　58
5　戸籍は世界無二の制度——欧米、中国の身分登録との違い　65

第2章　国籍という「国民」の資格——日本国籍と戸籍の密接性

1　近代国家における国籍——忠誠義務から個人の権利へ　75
2　日本の国籍法の誕生——血統主義の採用　85
3　「家」に従属する国籍——家族に求められる「血」の同一性　95
4　戦後における国籍法の改正——民主化と「日本人」の範囲　103

第3章　近代日本と戸籍——「日本人」を律する家

1　近代以前の戸籍の変遷——封建社会の人民台帳　107
2　明治国家形成における戸籍の意義——「元祖日本人」の画定　112
3　戸籍とは「家」なり——家族と「国体」をつなぐ戸籍　132
4　戸籍の純血主義と家族主義——退けられた個人主義　141
5　領土画定と「日本人」の拡大——戸籍による蝦夷地・琉球の「日本化」

第4章　植民地と「日本人」——戸籍がつかさどる「民族」「国籍」「血統」

1　植民地における「日本国籍」——国籍に表れた強者の論理　161
2　帝国における戸籍のモザイク——「日本人」のなかの「外地人」　171
3　「民族」を左右する戸籍——「血統」を食い破る家の原理　186
4　越境する「帝国臣民」と戸籍——「日本人」を創出する戸籍の諸相　199
5　満洲国の「国民」とは？——在満「日本人」の国籍と戸籍　215
6　皇民化政策の急所であった戸籍問題——守るべきは内地戸籍　224

第5章　戦後「日本人」の再編――「帝国」解体と「帝国臣民」の戸籍と国籍
1　旧植民地出身者の「外国人」化――内地戸籍が「日本人」の証　231
2　戦後「日本人」の回収――引揚者と戸籍　255
3　戦後沖縄と戸籍――「日本人」への復帰と戸籍の再製　262
第6章　戸籍と現実のねじれ――開かれた制度となるには
1　戸籍の差別主義のゆくえ――外国人と婚外子に対する壁　275
2　「国民」の資格をめぐる境界線――問われる日本の国籍政策　281
3　東アジアにおける戸籍の帰趨――韓国・台湾における身分登録制度の変革　290
おわりに――「民族」「血統」「国籍」というフィクション　297
注　307
あとがき　333
索引　342